

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

令和元年七月十三日(土曜日) 午後五時開演

演目解説 山内麻衣子(金沢能楽美術館学芸員)

狂言 狐塚(きつねづか)

狐塚と呼ばれる田へ鳥追いにやらされ太郎冠者は、鳴子を使い鳥追いに興じます。日が暮れて暗くなるにつれて、太郎冠者は心細くなり、狐に化かされはせぬかと怯えます。そこへ闇の向こうから声がして、声の主は次郎冠者を名乗ります。狐の仕業と決めつけた太郎冠者は次郎冠者を鳴子で縛り上げ、同じく慰労に来た主人にもそうして、二人を青松葉でいぶします。太郎冠者が鎌を借りに行く間に縄を解いた二人が太郎冠者を倒し、それをなおも狐の仕業と思う太郎冠者が追い込みます。

能 蟬丸(せみまる)

目の不自由な少年(ツレ)を輿こしに乗せ都から逢坂山おうさかやまに向かう一行(ワキ・ワキツレ)があります。少年の名は蟬丸の宮、延喜えんぎの聖代を謳うたわれる醍醐天皇第四の皇子です。勅命を受けた清貫(ワキ)は蟬丸を山に捨てる天皇の真意を理解しかねるようですが、蟬丸自身は彼を山に捨て剃髪ていはつさせて前世の罪を償わせようとする親の慈悲と受け止めます。しかし、実際に髪を剃られ、目立たぬ服装に着替える段になると動揺は隠せません。一人残された蟬丸は琵琶を抱き杖を持つ姿で泣き転げます。蟬丸とは別に醍醐天皇第三の御子、皇女逆髪さかがみ(シテ)も、前世の業因か心が折々狂乱し、髪が逆立つことを理由に自ら皇女の身を捨て、泣きながら都を離れます。逆髪が逢坂の関近くを通りかかった時、雨夜の闇から村雨の音に混じって気高い琵琶の音が聞こえてきます。逆髪が藁屋わらやの内を立ち聞く気配を、藁屋の主は察知して、藁屋を提供してくれた博雅の三位かと声を掛けます。その声は正しく逆髪の弟宮、蟬丸の声であると気がつきます。互いに手を取り交わし、涙の再会となりました。皇子の生活から一変した現在の境遇を互いに悲しみ、とりわけ蟬丸の藁屋暮らしを逆髪は思いやり心を痛めますが、二人で支えあう生活は醍醐天皇の慈悲心に背くことになりました。逆髪は後髪を引かれる思いで藁屋を後にし、その声が遠ざかるのを蟬丸も泣く泣く聞き送るのでした。

(西村 聡)

シテ(逆髪) 黒頭くろがしらをつけ、女増髪おんななまつかみ又は泣増なみぞうの面をかける。摺箔すりばくを着附きつけに着、その上に唐織かたがわひを脱掛ぬぎかけに着る。(持物、扇、篋)

(午後七時頃終了予定)